

るから、この日、この海域を、和歌山市方面から淡路島に向って飛翔していた個体数は、膨大なものになると考えられる。

元来アサギマダラは、独特の飛翔力によって、移動性・分散性の強い種とされているが、なぜ集団で移動をするのか？ また、前述のように、仮に移動は高温を避けるのが目的であるとした場合、なぜ距離的に近い背後の山地に移動せず海を渡るのか？ また、これらの蝶は、淡路島を目ざして渡ってきたのか、あるいは淡路島を中継地としてどこかへ飛んでいくのか？ さらに、なぜ風もないのにすべての個体が同一方向に飛んで行くのか。まして、なぜ捕獲するために追い廻した後もその方向が変わらないのか……など、興味は尽きない。

四方を海に囲まれた淡路島に住む我々にとって、今回のアサギマダラをはじめ、従来より知られている何種類かの海を渡る一渡りをする一昆虫類の研究は、大いに興味のある課題である。

今後、同学諸兄の協力によって、これらのメカニズムが1日も早く明らかにされることを期待したい。

アキグミの花に集まるクロフオオシロエダシヤク

1977年4月29日午前10時過ぎ、植物研究家の榎賀正夫氏と共に、南淡町灘山本から論鶴羽山に向けて登っていた途中、山本の集落を過ぎ、2Kmあまり登った論鶴羽山中腹の登山道脇に、アキグミ *Elaeagnus umbellata* Thumb. の樹高3mあまりの木があり、白色の花が満開であったが、その花にハチ、アブ類に混じってクロフオオシロエダシヤク *Pogonoprgia nigralbata nigralbata* Warren が、4個体吸蜜しているのを目撃した。しばらく観察している途中で、飛び立った個体もあれば、どこからともなく飛来して吸蜜を始める個体も見られた。

尚、当日の天候は晴れで無風、クロフオオシロエダシヤクの吸蜜姿勢は、先の吸水の例(本誌No16)と同じで、翅を広げたままであった。(登日 邦明)

洲本市池ノ内・猪鼻にアカシジミ産す

従来、淡路島でのアカシジミ *Japonica lutea* Hewitsonの記録は、藤平 明氏によって南淡町阿万から採集されているだけであったが、筆者は、1977年5月27日午後、松喰虫の被害調査のため洲本市池ノ内の洲本カンツリー・クラブに出掛けた際、同クラブのゴルフ・コース端のコナラの林で、数頭の本種を目撃し、そのうちの1頭を採集した。

また、2日後の5月29日午前9時30分すぎ、洲本市猪鼻ダム上流で行なわれた探鳥会に参加した際、*Quercus* の葉上に静止していた本種を目撃した。

これらの例から、本種はこの山系に広く分布するようであるが、一度詳細に調査をする必要があるだろう。

尚、上記の標本は、筆者が保管している。(登日 邦明)